幸せな悪夢

トミー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幸せな悪夢

【Ｎコード】
Ｎ７１９３Ｚ

【作者名】
トミー

【あらすじ】
平凡な少年の不思議な体験です。ホラー、と言うよりはファンタジーに近いかもしれません。ありがちな展開かもしれませんけど楽しんでいただければ幸いです。

夢と現実の境界

『プロローグ』

一人の少年がいた。どこにでもいる高校一年生。学校の成績は良くもなく悪くもない。運動も人並みにできる。特筆した才能なんてない。いわゆる『凡人』だ。

そんな少年が体験した“夏の思い出”である。

◇

第一章【はじまり】

照りつける日光、うるさいほどに鳴くセミの鳴き声、それとともに聞こえてくる耳障りな教師の声。

今日は夏休み前日、明日からは待ちに待った夏休みのはじまりだ。

教師は宿題はきちんとしてくるようにだとか、危ないところに行かないようにだとか言っているようだが、そんなことは俺の耳には全く届いていない。

俺は今日から夏休みをいかに楽しもうかと考えているだけだった。

（なにして遊ぶかな～？）

空を走る一筋の飛行機雲をボ～っと眺めながら夏の計画をたてていた。

「それじゃあ有意義な夏休みを過ごすように」

ようやく終わった教師の話。それとほぼ同時にちりじりに別れていく生徒たち。

「やっと終わったぜ」

他の生徒と同じように帰り支度を初めていると

「沢崎～」

後ろから俺の名前を呼ぶ気の抜けた声がする。
「相変わらず間抜けな声だな神谷」
こいつは俺の幼なじみの神谷慎吾。小学校からの腐れ縁だ。
「そういうお前は相変わらず失礼なヤツだな。まあいいや、さっさと帰ろうぜ」
「ああ、分かってるよ。今帰る準備してるからちょっと待て」
普段から置き勉している俺の机の中はまるでごみ箱のようになっている。夏休み前ともなると持ち帰る教材の量も他の生徒の3倍くらいあるのだ。
「ゲッ！　凄い量だな。ほとんどゴミじゃねえのか？」
「うるせえ！　これでも今日は少ない方だぞ」

「多いときのお前の机の中を見るのが恐ろしいよ」

「さてと、終わったぞ」

パンパンに膨らんだカバンを抱え教室を出る。予想以上のカバンの重さにまるで鉄球でも引きずっているように思えた。ただでさえ暑いのにカバンのせいで余計に暑い。このとき俺は決心した、もう置き勉するのはやめようと。

「沢崎、帰りにちょっと付き合ってほしいんだが」

「ん？　ああ、別に構わねえけどどこにだ？」

「映画だよ」

「またかよ、この間行ったばっかじゃねえか」

神谷は大の映画好きで新作が出るたびに行っているらしい。それだけならいいのだが問題はそ

れに毎回俺も付き合わされるということだ。

「そういうとこは普通女連れて行くもんじゃねえのか？」

「そんなヤツがいればお前を誘ったりしねえよ」

そんなにしょっちゅう映画を見る金が一体どこにあるというんだ？こいつの収入源を知りたい、そして俺にもその一部を分けてもらいたいものだ。

「で？　今度はどんな映画なんだ？」

「ホラーだよ、めちゃくちゃ怖いらしいぜ」

「ふ～ん」

「お？　なんだ？沢崎、もしかしてびびってんのか？」

「どうしてそうなる！」

まったく、何が嬉しくて男二人でホラー映画見に行かなきゃならんのだ。まあ、それをいつも断らないでついて行くのは映画の料金がこいつのおごりだからだ。マジでこいつの金の出どころはどこだよ？と気にしつつくだらない話をしながらしばらく歩いて学校近くの映画館に着いた。

「結構混んでるな」

「文句言ってもしゃあねえだろ、ほれ」

神谷は用意していたチケットを俺に手渡した。そのチケットを係員に見せて俺達は館内に入って行った。チケットに書いてある席に座り映画が始まるのを待つ。そこまではよかったのだが問題はその後だった。　映画が始まるやいなや隣に座っている神谷はギャーとかワーとか女み

たいな悲鳴をあげている。

（怖いなら見なきゃいいのに）

終わってみれば神谷の悲鳴のせいで映画の内容は一つも分からなかった。

結局、俺は何をしにきたんだろう？

無駄な時間の浪費だった。もうこいつとは二度と映画に来ないようにしよう。

「イヤ〜、怖かったけど面白かったな」

「ああ、そうだな」

おごってもらった手前、文句も言えないので適当に相づちをうっておいた。

映画館を出てみると外はもう日が沈み、綺麗な満月が顔を見せていた。

「それじゃあ、俺はこっちだから。今日は付き合ってくれてサンキュー」

そう言って神谷は帰って行った。

「はあ～、さてと俺も帰るとするか」

今日は疲れた。

早く帰って寝たい、そう思いながら駆け足で家路を急ぐ。普段歩いている学校の帰り道も日が降りると全く別の顔を見せている。

しかし、そのとき俺は奇妙な感覚に襲われた。まるで背中を無数のナメクジがはい回るような悪寒。体中に鳥肌がたっていた。夏だというのに体が震える。

気がつくと俺はさっきまでにぎやかだった大通りを外れ、人気のない狭い路地に迷いこんでいた。

「あれ？おかしいな、こんなところで道に迷うはずがないんだが」

俺が今歩いているのはよく知った学校近くの映画館から家への帰り道……のはずなのだが、こんな道は初めて通る。

「くっそ～、どこなんだよ！？ここは」

行けども行けども暗闇が続くばかりだ。

「何なんだこれは！？」

と、そのとき

「あなた、道に迷ったの？」

「え？」

突然の声に俺は何が起きたのか分からず、声の聞こえてきた方へと振り向いた。そして、そこにいたものを見て再び俺は恐怖を覚えた。

俺に声をかけてきたのは少女だった。ただの少女ではない。黒のローブ、黒く長い髪、黒い瞳。まるで、背景に溶け込むような漆黒、そし

て、それとは対称的に透き通るような白い肌をした少女。年齢は俺とさして変わらないように見える。

だが俺が恐怖したのはそいつの外見ではなく、こいつがどこから現れ、いつからここにいるかということだった。

「あなた、道に迷ったの？」

漆黒の少女は同じ言葉を繰り返す。

俺は直感的にこいつが危険な存在であると感じた。だが、そうだと分かっているにもかかわらず、なぜだか体は金縛りにあったように動かなかった。

「誰なんだ？お前は」

少女は俺の質問をバカにしたようにクスクスと笑っている。

「誰も自分が何者なのかなんて知ることはできないわ」

何なんだこいつは？頭いかれてんのか？

「悪いけど急いでるんだ。そういう話なら他をあたってくれ」

少女は再びフフと不気味な笑みを浮かべた。

そして少女は俺の方へゆっくりと近づいてくる。

「残念だけど私の方はあなたに用があるのよ」

そう言うと少女は俺の顔にその真っ白な手を当ててきた。

「冷たっ！！」

俺の頬に当てられた手はまるで氷のように冷たかった。そこで俺の意識は途切れた。俺が最後に見たものは不気味に笑う少女の顔だった。

悪夢の始まり

第二章【失われた日常】

朝日がまぶしい。ここは俺の部屋だ。見慣れた窓からはいつも見ている朝日がいつの間にか入り込んでいた。眠ってしまったらしい。もうとっくに日が登っている。それにしても……。

「夢、か…」

なんだか変な夢だったな。と、無意識に頬に手をやると頬はひんやり冷たかった。

そのとき、またあの感覚が俺を襲った。背筋をナメクジがはいまわり、全身に鳥肌がたつ感覚。そしてそれと同時に俺の頭の中に人の声が聞こえてきた。

『やっとお目覚め？随分ねぼすけじゃない。おかげで待ちくたびれたわよ』

振り向くとそこには夢で見たあの漆黒の少女がこちらに不満そうな顔を向けている。

俺はそれを見て寝ていたベッドから飛び起きた。そんな俺を見て相変わらず彼女は不気味な笑みを浮かべている。

「どうしたの？そんなに怯えて」

「お前は一体？」

少女はその質問は聞きあきたというような表情を浮かべる。

「私が誰かなんてどうでもいいことよ、それにあなたがそれを知ったところで何も変わらない」

こいつは何者だ？なぜ俺の前に現れる？こいつの目的はなんだ？疑問が次から次へと溢れてくる。

「わかった、お前が何者かはもう聞かない。だが一つ教えてくれ。お前の目的はなんだ？なぜ俺につきまとう？」

少女は俺の質問にしばらく答えず、俺をじろじろ観察していた。多分、このとき俺はびびってるように見えたのだろう。それを彼女は面白がって見ていたんだと思う。

少しの間観察し、満足したのか彼女はようやく口を開いた。

「あなたに協力してもらいたいことがあって来たの」

「は？」

俺は自分の耳を疑った。なぜ俺が見ず知らずの不気味な少女に協力してやらねばならんのだ？

「ふざけんな！人に散々つきまとって、その

上協力しろだと！？人をからかうのもたいがいにしろ！」

これにはさすがの俺も切れた。

「心配しなくても、あなたに拒否権はないわ」

どこまで自分勝手なヤツなんだ？もうほっとこう。俺はその少女を残して部屋を出ると、朝の用意を早々に済ませ家を後にした。

だが、俺はこのときまだ、分かっていなかった。彼女が言っていた『あなたに拒否権はないわ』という言葉の本当の意味を……。

◇

それからというもの、その少女は頻繁に俺の前に現れるようになっていた。そしてある時、少女はこんなことを言い残していった。

「あなたの死期が迫っているわ。私ならそれ

を食い止める事ができる。ただし、あなたが協力してくれればの話だけどね」

また訳の分からん事を言い出したぞ。まったく、いい加減にしてほしいぜ。

「だいたい何で俺が死ぬなんて事が分かる？俺はこの通りピンピンしてるじゃねえか？」

「信じたくなければそれで構わないわよ。ただし、後で後悔するのはあなただけどね」

「……」

勿論、こいつの言うことなんて信じちゃいなかった。そんな根拠なんてどこにもない。

だが、万が一、本当に万に一つの確率でこいつの言うことが正しかったら？そういう考えが頭から離れないのだ。

ただ、こいつが何者か分からない以上、信用す

る事は出来ない。
そんな俺の心を読み取ったかのように少女は口を開いた。
「そんなに私の正体が知りたい？」
「少なくとも、正体が分からないヤツの言うことなんて信じられねえな」
少女はフゥ～と小さくため息をついた。
「仕方ないわね、分かったわ、教えてあげる。私の正体を…。ただし、それを聞いたらちゃんと私に協力してよ？」
「それは俺が決める」
少女はもう一度ため息をつくと話し始めた。
「私は……、私はあなた達人間の言うところの悪魔みたいな存在かしらね」
「なっ……」

これには俺も何と答えてよいのか分からなかった。悪魔だと？

「だから教えるのはイヤだったのよ。どうせこんなこと信じてくれないでしょうからね」

「当たり前だ！自分のことを悪魔だって言っているヤツの言うことを『はいそうですか』なんて言えるヤツなんざよほど頭がいかれてるか、よほどのお人好ししかいないだろう！」

「やっぱり、そうよね……」

少女の顔からは不気味な笑みが消え、悲しそうな表情だけが残っていた。

「……ったく、仕方ねえな！」

「え？」

「俺はよっぽどお人好しらしい」

こういうとき無性に自分の性格がイヤにな

る。

「協力してやるよ、ただし俺に害が及ぶようなことがあればその時点で協力は破棄するからな」

「分かってるわよ」

少女の顔にはいつもの不気味な笑みが戻っていた。まったく、現金なヤツだ。

「そういえば、お前の名前、まだ聞いてなかったな」

「え゛？そ、そうだっけ？」

「ああ、聞いてないはずだぜ。これから協力するんだ。少なくとも名前くらいは教えてくれよ」

「う〜〜〜、どうしても？」

「なんだ？言えない理由でもあるのか？」

「イヤ、そういうわけじゃないんだけど…」
なんだか妙に歯切れが悪い。たかが名前くらい教えてくれてもいいもんだが。
「わかったわかった！言うわよ……、私の名前は……、『@シ＊£』よ！」
「はい？なんだって？」
まるで蚊の鳴くような小さな声で、何を言っているのかまったく分からない。
「もっと大きな声で言ってくれ！」
「……『ア、アシリル』よ！なっ、なによ？笑えばいいでしょ！」
「いや、何で笑う必要があるんだ？」
「だって、変な名前じゃない！」
「まあ確かに変わってはいるが、笑うほどのことじゃないだろう？」

「ほ、本当に！？」

「ああ、俺は人の名前を笑うなんて失礼なことはしねぇし、もしそんなやつがいたらぶっ飛ばしてやるよ、だから気にすんな」

その言葉を聞いたアシリルの顔にあの不気味な笑みはなく、どこにでもいる普通の少女の笑顔があった。

それにしても、最初現れた時とはまるで別人だな。

「も、もうなにカッコつけてんのよ？私の事はいいの！それよりもあんたの事よ！」

「そうだったな、で？俺の死期が迫っているってどういうことだ？」

「死期が迫っているというだけで何が原因で死ぬかまでは分からないわ」

「じゃあ俺は何をすればいいんだ？」

「今は特に何もする必要はないわ。時が来ればおのずと分かるから。言える事は『気をつけて』としか……、じゃあくれぐれも不用意な行動はしないようにね」

そう言うとアシリルはまた暗闇の中に消えていった。

それからしばらくは何も起こらない、いつもの日常だった。今思えば、これは嵐の前の静けさだったように思える。

だが、その嵐は何のまえぶれもなく突然やって来た。

ある日、俺はいつものように神谷と一緒に遊びに出かけていた。ちなみに、この件は神谷には伝えていない。伝えたところで帰ってくる言葉

は分かっているからだ。

さて、話を戻そう。神谷と出かけていたときに事件は起きた。

神谷はある洋服店の前で立ち止まると、ここによりたいと言って中に入って行った。俺はというとファッションに関してはまったく興味がないので外で待っていることにした。

「こりゃ長くなるな……、まったく、映画館の時といい、女みたいな性格だな」

と、ブツブツと文句をたれている俺のそばに誰かが駆け寄って来た。

「ん？」

そこにいたのは少女だった。背丈は俺の胸元あたりで、歳は小学校高学年〜中学生くらいだろうか？

その少女は俺の顔をじっと見ている。

「どうしたの？迷子かい？」

思わずこちらから話しかけてしまった。

「……」

少女はしばらく黙ってこちらを見たあと、俺の腕を掴んでどこかへ連れて行こうとした。

「おい！何なんだ！？いきなり！」

「……こっち」

それだけ言うと少女は再び俺を引っ張りだした。

（もしかするとこの少女が助けを必要としているんじゃ？）

と、俺は適当な考えをめぐらせながらも少女に着いて行った。

だが、少女の行く先はどんどん人の気配が無く

なっていき、暗い裏路地に入って行く。さすがに少し不安になってきた。

「なあ！一体どこへ連れて行く気だよ！」

俺は手を振りほどいた。すでにここは先程までいたにぎやかな場所から遠く離れた狭い路地である。

「……来て」

「え？」

そして、少女が俺の手を再び掴もうとしたそのとき、その手を何者かがはたいた。

「あんた、私があれほど忠告してあげたのに、もうちょっと注意しなさいよね！」

そこには怒りの表情を浮かべた、あの漆黒の少女、アシリルがいた。

命の重さ

第三章【命の天秤】

「アシリル、何でここに？」

「何でじゃないわよ！この馬鹿！あんた、私がこの前言ったこと忘れたの！？」

突然現れたアシリルにも驚いたが、もっと驚いたのはアシリルの怒りようだ。こいつといた時間はそれほど長くはないが、それでもアシリルがこんなに怒りをあらわにしたのは初めてだ。

「この前言ったこと？」

「『不用意な行動はとるな』って言ったでしょ？」

「そういやそんなこと言ってたな。でも、それとこの子と何の関係があるんだ？」

「その子は人間じゃないわ、既に死んでいるけ

ど自らの死を受け入れていないの」

「それって……」

俺はアシリルの言葉を聞き、自分をここまで連れてきた少女を見て青ざめた。

「いわゆる地縛霊、ここにあなたを連れてきたのは多分、あなたを仲間にしたかったからじゃないかしら？」

「仲…間……」

その言葉が何故か俺の心に響いた。この少女は今までずっと一人ぼっちで誰でもいいから遊び相手が欲しかった、だから俺をここまで連れてきたのか……。

少女はまるで捨てられた子犬のようなつぶらな瞳で俺を見ている。

「だめよ！情けをかければあなたも彼女のよう

にここから離れられなくなる」
「なあ、この子これからどうなるんだ？」
「前に私があなたに協力してほしいって言った
こと覚えてる？」
「忘れられるわけねぇだろうが！」
「あなたに協力してほしいことっていうのは
ね……」
アシリルの表情が急に暗くなった。そして、次
に俺は自分の耳を疑う言葉を耳にした。
「あなたにはあの子を消して欲しいの」
俺の思考はしばらく停止していた。
「あ～、悪いちょっと聞こえなかった、もう一
回言ってくれ」
そうさ、そんなことがあるはずない。いくらこ
いつが悪魔でも、そんな残酷なこと人間の俺に

頼むはずが……。

「あなたにあの子を消して欲しいと言ったの」

「ちょっ、ちょっと待ってくれ！どうして俺がそんなことを？」

「あなた、言ったわよね？協力するって。別に嫌ならいいのよ、他の人に頼むから。ただし、あなたはここに置いていくけれど」

「くっ！」

これじゃあ自分の命とこの子の魂を天秤にかけてるのと同じじゃねぇか！

「どうするの？やるの？やらないの？」

「わかった、やるよ。だけどな俺には何の力も無いんだぞ」

そう、俺はどこにでもいるただの一般人。霊を消す力なんてあるはずもない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7193z/

幸せな悪夢

2012年1月10日00時53分発行